

高大連携により 今後の学びと進路を考える —学部長講座がスタート—



香里中学校・
高等学校教諭
伊東 徳治

生徒のモチベーション・学力向上をめざして

同志社の4高等学校では、2004年度2学期より今出川・京田辺の大学キャンパスにおいて、1・2年生の希望者を対象に学部長講座を開講しています。これは休日となった土曜の午前中を活用し、生徒たちの幅広い進路選択をサポートするもので、高大連携講座の一環として始めたものです。

学内高校の生徒のほとんどが同志社大学・同志社女子大学へ進学する現在、大学進学に対するモチベーションを高校の3年間を通じて保ちにくい生徒が多いという指摘が、しばしばなされています。明確な将来設計を抱えて学部・学科の選択ができる生徒も多くはありません。3年生になると学部説明会が行われますが、同じ同志社で学びながら、高校時代に大学のキャンパスを訪れる機会は減多にないのです。一方、近年は大学側から、学生の学力向上の必要性を指摘する声が多く上がっています。これらの現状を改善する目的でスタートさせたのが学部長

講座です。

視野が広がると、大学で何がしたいが見えてくる

本講座のコンセプトは学部の紹介ではありませんが、今年度はまず学部長に講師をお願いしました。講義内容は、学問の面白さ、ご自分の研究課題、研究分野の最先端事情など、生徒たちの進学に対する意欲や学問への憧れ、知的好奇心の刺激を促すようなものになっています。各講座のテーマは「有意義な学生時代を過ごすために」（石原好之工学部長）、「あすの日本経済をよむ—福祉・環境を中心に—」（伊多波良雄経済学部長）、「今、破産法が旬—倒産における不易と流行—」（佐藤鉄男法学部長）、「イラク戦争の大義と宗教国家アメリカ」（森孝一神学部長）、「日本の企業システムを考える—ビジネス研究のおもしろさ」（岡本博公商学部長）、「日本人の幸福感とは？あなたは『喜怒哀楽』を上手に表現できますか？」（黒木保博文学部長）、

さらに豊かな「大学の香り」を生徒たちに

香里高等学校で行っている土曜講座では、他にも国立公立大学受験者向けのアドバンス講座やステップアップ講座、資格取得講座、教養文化講座などがあり、積極的に学んでいる生徒が大勢います。昨年から大学の商学部で始まった簿記講座は高校3年生も受講できますが、これも放課後を利用して参加する生徒が60名近くいました。大学の大使講座を受講する生徒もいます。今年度は香里中学校で総合的な学習の時間を活用し、3年生を対象に「中3リベルタス」という時間を設けて各分野から社会人を招き、仕事についての講演が行われました。これも将来の仕事を考えながら「自分たちはなぜ学ぶのか」を発見させ、生徒のモチベーションを高める機会を増やそうという試みで、近い将来、高校への導入も考えています。これら課外講座への生徒たちの関心の高さをみると、彼らの間に大学レベルの講義に対する関心やニーズはかなりあるのではないかと思います。

本講座へは各学部長からも高い評価をいただいております。開設を契機に、来年度からは女子大学や新設学部・学科を含めて、さらに多様な分野の先生方にご登場いただく考えです。1年次生を対象としている学部の入門講座を高校生に開放してはどうかというご提案もいただきました。これを契機に高大連携講座としても、大学との関係をさらに密にしていきたいと考えています。（談）



▲真山達志政策学部長による「新しいコミュニティの模索」の講座風景

「新しいコミュニティの模索—コミュニティ・ビジネスの可能性と課題」（真山達志政策学部長）。高校生にとっては難しいテーマもありましたが、いずれも平易にアレンジされた内容で、岡本学部長は企業が利益を上げるためにどのようなことを考えてきたのかを自動車産業を例に挙げて説明したり、黒木学部長は生徒同士でコミュニケーションを取る練習を取り入れたり、と、さまざまな工夫を凝らしてくださいました。

1講座の受講者数はまだ40〜50名程度ですが、参加した生徒の意識はたいへん高く、どの講義でも何かを得ようという真摯な姿勢が感じられました。これにより、大学の講義に関心をもつだけでなく、生徒たちがもっと広い世界に目を向けて自分の将来を見据えるきっかけになればと願っています。

知識と行動が実社会につながる体験 —国際高校生が英国の「起業大会」に挑戦—



国際中学校・
高等学校教諭

中川 好幸

二股 一郎

学習の成果を発揮する場として

「ザ・グローバル・エンタープライズ・チャレンジ」は、青少年に科学技術への関心を高めるため、英国の行政機関が主催している世界的な大会です。昨年11月17、18日の2日間、全世界から15チームが参加してスコットランドで行われた第3回大会に、同志社国際高等学校3年生8人がインターネットで日本代表として参加しました。日本チームとしては初めての参加でした。

大会は、18歳以下の8人でチームを結成し、当日発表される科学技術に関するミッションを24時間以内にとりあげてプレゼンテーションし、その内容を競うというものです。

本校ではマルチメディア学習施設「コミュニケーションセンター」を利用して、さまざまな情報ソースからリサーチした内容を整理して、自分なりの考えをまとめ、効果的にプレゼンテーションするという一連の作業を、各教科の授業の中で日常的に行っています。そのせいか、生徒たちも特に構えることなく、

当日を楽しみにしていました。

競技の様子

大会当日、日本時間の夜8時に出されたミッションは「8、12歳の子供に科学的な興味を起こさせる、地域性も考慮した、体験型の博物館展示物を考えよ」というもの。英文でのビジネスプランも求められる、なかなかの難問でした。

生徒たちは、早速自分たちが取り組むテーマの話し合いに入りました。当初は「子ども」というキーワードから、楽しいものの、面白いもののアイデアがどんどん出て、収集がつかないまま深夜になったのですが、新潟県中越地震の直後で「地域性」にひっかけて「地震」がテーマとして浮かび上がり、「免震構造を体験する装置」というプランで進めることになりました。

この時点で夜中の12時。しかしテーマが決まれば、全体のスケジュールを作る者、免震構造のリサーチをする者、模型を作る者、英文の原稿を作る者、ビジネス面からアプローチする者などの分担が決まり、スムーズに作業が進み始めました。帰国

生3人、一般生5人、理系・文系両方の生徒がいるという、本校ならではのチーム編成が活かせるプロジェクトだったと思います。それぞれ仮眠をとりつつの作業で、中には早朝5時頃まで起きていた生徒もいました。

翌日は公欠扱いでしたが、期末試験を翌週に控え、参加した生徒の大半が授業に出席したため、期限内に合うかどうか気を探りましたが、最後の追い込みは見事なもので、鬼気迫る表情で文章をメールでやりとりし、話し合う生徒の姿は、企業の会議室と全く同じ風景でした。

知識を社会で生かす体験

こうして生徒たちがまとめ上げた展示物のプランは、免震構造の部屋と通常構造法の部屋、その両方で人工的に地震を体験



英語によるプレゼンテーションを行う生徒たち

して免震構造の有効性を体験した後、その構造の違いを模型などで理解し、さらに自分でも作ってみることができるというもの。そして近隣の小学校の生徒数などを勘案した上で年間の入場者数を見込み、企業の広告料やメンテナンス代、運営のための人件費まで算出した上で、最終的に入場料を設定して収支予想を立て

た、詳細なビジネスプランも提示されました。そこには収益の中から一定額を災害復興費や防災のための研究費として寄付するというプランも付け加えられていました。

その後、英語による3分間のプレゼンテーションをビデオ撮りし、そのファイルをインターネットで送信して、ようやく協議終了です。生徒たちは眠気も忘れ、充実感にあふれた表情で、ミッションを完遂できたことを喜び合っていました。

残念ながら優勝は地元スコットランドチームでしたが、その発表前に、特に我々日本チームに対してだけ「よくまとまった素晴らしい内容だった」とのコメントがありました。インターネット参加のハンディもあったと思いますが、内容については高く評価してもらえたのだと満足しています。

生徒たちは優勝を逃して心から悔しがっていましたが、「楽しかった」「またやりたい」と口々に言っていました。それほど充実して面白い24時間だったのでしょうか。教室内での学習が、そのまま社会とつながっているのだということ、アイデアが形になっていく過程を身をもって体験できたのですから。

発表内容は、その後授業の中でも紹介し、他の生徒に対して良い刺激となっています。今年6月頃に開催される予定ですが、すでに「参加しよう」という声が大きくなっていきます。学習が実社会、それも世界につながる体験ができる貴重な機会として、今後もぜひ参加を続けたいと思います。(談)

※プレゼンテーションの模様はこちらでご覧いただけます。

http://www.entreplanet.org/whats_new/041118/GlobalChallenge.html

スポーツによる社会貢献・ 地域振興の可能性を探る 「スポーツ政策シンポジウム」開催



大学法学部教授
横山 勝彦

2004年10月16日、寒梅館ハーディーホールで、総合政策科学研究科主催のスポーツ政策シンポジウム「地域貢献とスポーツ文化」が開催されました。

新しいスポーツ文化の同志社からの発信

スポーツというと、日本では、一面ではとかく「勝ち負け」に興味が始まり、他面においては、有名選手の夢や感動といった情緒的な取り扱いに関心が集中する傾向にあります。しかしながら、スポーツは社会の現代的な課題と乖離するものではなく、社会貢献、地域活性化、世代間交流などの問題に有効に作用する諸機能を有しています。こうしたスポーツが持つ多面的機能の有用性を同志社から発信する目的でシンポジウムが開催されました。

昨年の、本学出身の現役プロ野球選手も参加した「日本の野球を考える―その法的地位と社会貢献―」に引き続き、今回はラグビーを題材に、競技力の向上、普及の推進、行政・企業との関係性、地域主義、法律上の問題を論点として活発な議論が

展開されました。

シンポジウムは、真山達志総合政策科学研究科教授、萩本光威ラグビー日本代表監督（1982年経済学部卒）、大八木淳史日本ラグビーフットボール協会普及育成委員（1985年商学部卒）、川井圭司政策学部助教授の4氏によるキーノートレクチャーと、筆者をコーディネーターとした講演者によるクロストークおよび会場との質疑応答で構成されました。

「スポーツと地域」（キーノートレクチャー1）

真山達志先生からは、行政機関によるスポーツ採用の目的が、教育や健康面への寄与というスポーツが持つ伝統的な機能とは異なる、地域経済とコミュニティの活性化の方向に位置付けられるように変化し、従ってなお一層のスポーツ政策の理論的・体系的な整備が必要となるとの指摘がなされました。

「企業とオールジャパンの課題」（キーノートレクチャー2）

萩本光威さんは、競技力の向上、競技人口の増大、ファンの獲得、地域貢献といったラグビー界の課題について、諸外国と

の比較や企業の現状などの豊富な事例を通じた分析をされ、日本の求心力は、すべての委員会や諸機関を統合する「一元化」にあると力説されました。

「普及活動と学校の取り組み」（キーノートレクチャー3）

大八木淳史

さんは、汚い・危険・きついといわれたラグビーのイメージを払拭し、ご自身が体験された「ノーサイドの精神」を学校という教育現場に浸透させる活動について、子供たちの能動的な行動は周囲の大人たちの関心に左右されると巧みな話術で説明され



クロストークにおける4人の講演者

ました。

「スポーツと法整備」（キーノートレクチャー4）

川井圭司先生は、今後のスポーツ振興にとって重要なテーマとなる法的諸問題について、スポーツ選手の雇用形態の多様化と労働者性、スポーツ事故の法的責任と社会保障制度の2点からアプローチされ、区分社会であったスポーツ界にも法的な関与と保護が必要となると指摘されました。

同志社ラグビーへの熱き思い（クロストークと質疑応答）

クロストークでは、勝利至上主義がよく問題視されるが、強い競技力が普及の推進や地域活性化につながる現実があり、高度化と大衆化というスポーツに内在するジレンマについての白熱した議論がなされました。

また、会場からは、学校体育の問題、行政支援のあり方、企業スポーツの撤退などの熱心な質問のみならず、「自由」な同志社ラグビーへの讃美、萩本ジャパンと大学院入学も決定している大八木さんへのエールも送られ、和やかな雰囲気の中シンポジウムとなりました。

文化装置としてのスポーツ

今後、スポーツが更なる社会的認知を獲得するためには、スポーツ界・行政・地域・企業・教育現場それぞれにおけるスポーツの多面的機能の活用を、横断的・包括的に取り扱うスポーツ政策の構築と、それを評価し支持する地域住民の認識レベルの高まりが重要となります。文化装置としてスポーツが社会に定着することを願っております。